

衆議院議員

なかそね やすたか

中曽根康隆が明かす！

孫が出馬を決意したときの言葉、

憲法改正への思い……

祖父・中曽根康弘から 受けた政治の「特訓」

——10月22日の衆院選で初当選を果たされました。国会議員として歩み始めたご心境をお聞かせ下さい。

中曽根 初めて経験することが多く、学びながら全力で駆け抜けている感覚です。日本の国難に国会議員として向き合う責任の大きさ、同時にやりがいを感じています。

——どのような「国難」をイメージされていますか？

中曽根 戦後の焼け野原といった目に見える国

難とは異なり、徐々に蝕まれていくような国難ですね。例えばじわじわと緊迫化する北朝鮮情勢、一向に歯止めがかからない少子高齢化などが頭に浮かんでいます。

——特に重視する政策を教えてください。

中曽根 外交です。冷戦構造が崩れ、多くの国が独自の道を模索している中、「世界における日本の役割とは何か」「日本が胸を張ることができる強みとは何か」を追求していきたいです。私は外交力と経済力は一体だと考えているので、景気

対策や中小企業対策・農業振興を含む地方創生にも力を入れたいですね。

——お祖父さまも積極的に取り組んでいらつしやる憲法改正はいかがですか？

中曽根 大前提として改正すべきです。新たな時代に合ったルール作りを日本人自ら考えていく



中曽根康隆氏 昭和57（1982）年生まれ。慶應義塾大学法学部卒業。米国コロンビア大学大学院で国際関係学修士号を取得。外資系証券会社勤務等を経て、平成29（2017）年の衆院選で初当選。父は元外相の弘文氏、祖父は元首相の康弘氏。

「中曽根」の重みを噛みしめる日々

——そもそも、なぜ国会議員になろうと思われたのですか？

中曽根 学生時代に父の選挙を手伝った経験が大きかったですね。「中曽根康弘と中曽根弘文は

ことは当たり前の話です。自衛隊についても、違憲かもしれないのに「何かあった時には命を張って守ってくれ」というのはあまりにも無責任なので、当然、安倍総裁の仰る通り、憲法に明記することは必要だと思えます。さらには前文。今のようなどこの国にも当てはまりそうな文ではなく、日本の歴史、伝統、文化を反映させるべきです。今の憲法の良い部分は残し、時代に合わなくなつた部分を変えていけばいいと思います。

祖父の憲法改正案には、戦争から帰ってきた人間の重い言葉がちりばめられています。弟を戦争で亡くし、目の前で部下が死に、祖国の焼け野原を目撃した人間の視点、感覚も引き継いでいきたいですね。

本当に多くの支援者の方々に支えられてきたんだなあ」という有り難みを学生ながらに実感し、支援者の方々のお子さん、お孫さん、ひ孫さんの世代に恩返しをしたいという気持ちで芽生えました。しかし、家族には反対されましたね。

——なぜですか？

中曽根 政治は甘い仕事ではないということですが。父の弘文からは繰り返し「中曽根」という名前で政治をやっていくことがいかに大変か」と言われました。

——重い言葉ですね。

中曽根 「覚悟がなかったらやめる」とはつきり言われました。実際、覚悟と意志がなければできない仕事だと感じており、父の言葉を噛みしめているところですよ。しかし、弱気になるのではなく、中曽根家に生まれた運命を前向きにとらえ、日本のために働きたいと考えています。

——お祖父さまも政界入りには反対されたんですか？

中曽根 反対はしませんでした。5、6年前に「政治家を目指したい」と伝えた時、一言、「チャ

し、先見性を持って国の舵取りをしていかななくてはいけません。

祖父は優しくも怖かった

——政治一家で育った苦勞を教えてください。

中曽根 良くも悪くも注目されることです。自分の言動が祖父や父の評価に影響を及ぼすことは幼少期から自覚していましたので、多感な時期に友達を楽しそうに遊んでいる時も自分自身を抑えていた部分がありました。また、「中曽根総理の孫」と言われ続けましたので、「康隆」という個人を知ってもらいたいという願望が常にありました。ただ、政治家になった今は「中曽根」の重みを受け入れず。先ほど申し上げたように、良い意味で家名を「利用」したいですね。

——お祖父さまの思い出をお聞かせ下さい。

中曽根 学生時代に同じ屋根の下に住んでいたのですが、学校から帰ってくるとよく玄関に本や新聞記事が置いてありました。テーマは外交安全保障、憲法改正、教育政策など様々。そこには祖

ンスをつかめ」と言われたことをよく覚えています。笑顔はありませんでした。

——チャンスをつかめ……。どのように解釈していらっしやいますか？

中曽根 やりたいことがあるならば待つのではなく、自らチャンスをつかみにいくことが大切だということだと思います。祖父も若い頃に親の反対を押し切って選挙に出ましたから、「意志があるならば自分自身で切り開いていけ」ということを伝えたかったのですね。私の座右の銘である「自我作古」にも繋がっています。

——当選後に何らかのアドバイスはございましたか？

中曽根 開口一番、「歴史を勉強しろ」と言われました。祖父の持論は「政治家は歴史の法廷の被告である」。政治家の判断が歴史にどのような影響を及ぼすのかわかりと見通した上で、行動しなければならぬということですよ。自分が決めたことが一時的に誰かを苦しめたとしても、5年後に多くの人を救うかもしれない。そのような決断をするためには歴史を知らなければならぬ

父の手で付箋が貼ってあったり、線が引いてあったりしました。祖父からすれば「康隆、これを読みなさい」ということですね。それらについて自分なりの感想を祖父に伝えることが私の日課だったので、祖父とのこうした交流も政治家を志すきっかけの一つになったのかもしれない。

また、私が20歳代半ばの頃に外遊に同行する機会があったのですが、ホワイトハウスでチェイニ副大統領（当時）と会談したり、中国で胡錦濤国家主席（同）や習近平上海市書記（同）と会食する祖父の姿を目の当たりにして、「ああ、やっぱりこの人は政治家なんだな」と感じましたね。かちんこちに緊張する私とは対照的に祖父は堂々としていました。

——おうちではどのようなお祖父さまですか？

中曽根 どこにいても「国が第一」です。子供心に「このような人が政治家になるべきなんだろかな」と思っていました。もちろん、「おじいちゃん」と孫々ですから、「康隆、肩をもめ」と言われたことや、一緒に犬の散歩に行ったこともあり。しかし、孫がそばにいて思わず緊張する雰

囲気を持った祖父でしたね。基本は優しいのですが、ふとした瞬間に見せる「政治家の表情」は厳しかったです。この取材の前に会ってきたのですが、熱心に本を読んで勉強していました。飽くな



き好奇心がなければ政治家は務まらないのでしょ
うね。祖父はよく「俺の体の中には国家が宿って
いる」と言っています。その言葉の重み、政治
家としての覚悟を私も常に心に留めています。

進次郎さんや櫻井翔君との「縁」

——話は変わりますが、自民党の小泉進次郎筆
頭副幹事長と同世代ですね。

中曽根 同い年です。同じ学年です。

——同じく政治一家に育って、同様の苦労を経
験されていると思うのですが、小泉さんに対して
はどのような印象をお持ちですか。

中曽根 年が一緒だとか、同じ世襲政治家だと
いうことは抜きにして、率直に「進次郎先生はす
ごいな」と思います。選挙中は自民党の顔として
仲間の応援のために全国を駆け回りながら、4回
全ての選挙で圧勝し、最近では自民党農林部会長と
して難しい改革も成し遂げました。安倍総理に対
してもしっかりと意見が言えます。見習うべき点
はたくさんありますね。人気だけでなく、実力が

あるからこそ筆頭副幹事長に抜擢されたのだと思
います。

——早く追い付きたい、追い越したいという思
いはありますか？

中曽根 それはいいです。ライバルと思ったこ
とは一度もありません。逆に進次郎先生に関する
書籍を読んだり、動画投稿サイト「YouTube
e」で進次郎先生の演説を見たり、色々勉強さ
せていただいております。遠くに見える背中をし
っかりと見すえながら、邁進していきたくないと考
えています。

——お二人は米国コロンビア大学大学院で同じ
恩師に学んでいたそうですね。

中曽根 そうなんです。時期は重なっていませ
んが、縁を感じますね。最近、恩師に会うと、
「進次郎があれだけ頑張っているんだから康隆も
しっかりね」と言われます。

——小泉純一郎氏の首相時代、お祖父さまは定
年制を厳格に適用され、政界引退を余儀なくされ
ました。「小泉家」に対して複雑な気持ちはあり
ませんか？

中曽根 祖父の考えは分かりませんが、少なく
とも純一郎先生と私との間にはなんのしがらみも
ありませんし、進次郎先生に対しては同じ世代と
して日本の未来のために共に頑張っていきたいと
いう気持ちが強いです。私は何らかの先入観を持
って進次郎先生と接していませんし、進次郎先生
も同じだと思います。

——人気アイドルグループ「嵐」の櫻井翔さん
とは同級生でいらつしやるそうですね。櫻井さん
はニュースキャスターとしても活躍中です。

中曽根 彼とは6歳から一緒に、最も近い仲間
の一人です。ずっと応援してくれていたもので、初
当選には心より喜んでくれました。櫻井君は問題
意識が高く、今でもしょっちゅう二人で日本が抱
える課題について話し合っていますよ。彼は真珠
湾に足を運んだり、日本兵の遺骨収集で戦地を訪
れるなど「現場」を重んじる人間でもあります。
刺激を受ける良き友人ですね。偶然にもお祖父さ
まが群馬の上毛新聞の元記者で、彼とも縁を感じ
ます。進次郎先生や櫻井君からも学びつつ、日本
のために粉骨砕身、働きたいと思っています。